

社会主義中国と創価思想

樋口 勝

目次

- 1 はじめに
- 2 中国共産党の宗教政策
- 3 中国のマルクス主義者・馮契の宗教観
- 4 社会主義社会に適合する宗教
- 5 創価思想との対話
- 6 おわりに

1 はじめに

本日は、創立者池田大作先生の日中国交正常化提言50周年を記念する、意義深いシンポジウムで報告をする機会を頂き、誠にありがとうございます。⁽¹⁾今日は「社会主義中国と創価思想」というテーマで、宗教を否定するはずの社会主義中国と、大乘仏教に基づく牧口常三郎先生や池田先生の創価思想が、なぜ交流することができたのか。つまり、中国における社会主義と宗教の交流は、なぜ可能であったのかという点について、中国の状況と創価思想を対比しながら検討していきたいと考えています。⁽²⁾（以下、敬称を省略）

ご存知のように、池田が日中国交正常化を提言したのは50年前の1968年。

1968年という、中国は文化大革命の真っ最中で、極左主義による宗教弾圧が極点に達していた時期でした。そんな時期に、池田は日中国交正常化の提言を行ったわけです。当時、池田は、共産主義と宗教について次のように述べています。「宗教をアヘンだときめつけるような共産主義者とは協調できるわけではない。だが、私たちの理念を理解する共産主義者に対して、反共の態度で臨んではならないと思う。私たちはコミュニストではないが、反共主義者であってはならない。国交というものは、イデオロギーの違う国と、どのように協調していくかという、困難な作業をやり抜くことだと思う⁽³⁾」と述べ、アジアの安定と繁栄、世界の平和のために、イデオロギーの異なる共産主義国家である中国とも親善交流をすべきだと主張されました。

それから50年。当時は、宗教間対話を行える状況ではなかったわけですが、それが50年経った現在、特に2001年以降（2001年北京大學池田大作研究会設立以降）、中国全土で池田思想研究センターが次々と設立され、今年（2018年）の10月には上海で第10回池田思想国際シンポジウムを開くまでになりました。その他、中国の各地で池田思想のシンポジウムが行われています⁽⁴⁾。

なぜ、宗教を否定するはずの社会主義中国と、宗教を根底にした創価思想が交流することができたのか。本日は、中国の宗教政策の変化と、馮契というマルクス主義の哲学者の宗教観に焦点を当てて、宗教という視点から交流の意義を考えていきたいと思います。

2 中国共産党の宗教政策

中国は、中国共産党の一党独裁の社会主義国家です。社会主義というと、マルクス主義。マルクスと言うと「宗教はアヘンだ」と主張したことから、社会主義、共産主義国家は宗教を否定する国家だと考えられてきました。実

際に、中国でも宗教は弾圧されてきた。ところが、1978年の対外開放政策以降、状況が変わりました。

一般に、マルクス主義の宗教批判は、次のようなものです。①人間の依拠心を増幅し、現実社会を軽視し、彼岸世界を説く。②非科学的な迷信を説く。③現実逃避させ、社会改革を阻害する。④宗教の権威を振りかざす独断論だ⁽⁵⁾、というものです。中国共産党は、今でもこのマルクス主義の宗教観を堅持していますので、中国の憲法（1982年）では信仰の自由を認めています。中国共産党の党員（約9000万人）には原則的に信教の自由はありません。中国共産党の宗教観では、「社会主義の発展によって、宗教は最終的には消滅する」と思っています。但し、「社会主義の初級段階（現代）においては、長期的に存在する」という考え方を持っている⁽⁶⁾。それゆえ、中国政府は、仏教、道教、イスラム教、カトリック（天主教）、プロテスタント（基督教）を五大宗教として公認し、一定の宗教活動を認めています。

しかし、そんな共産党の宗教観は、宗教を否定するわけですから、実際は、建国当初から厳しく管理されてきました。特に、1966年から77年まで続いた文化大革命という政治運動の時は、一切の宗教活動は禁止されました。仏像や文化財は破壊され、僧侶や神父は還俗させられています。中国伝統思想の儒教も批判されました。伝統文化も宗教も徹底的に否定され、社会主義だけが正義だ、という教条主義の時代であったわけ⁽⁷⁾です。

文化大革命が終わって、1978年になると、今の経済発展につながる改革开放政策が始まります。それまでの中国では、社会主義の建設に貢献することが道徳でした。しかし、文化大革命を経て、中国共産党は路線変更をします。今度は平等を旨とする社会主義ではなく、資本主義体制の市場経済を導入し、経済発展を目指して走り始めました。市場経済の導入ということは、競争原理を導入するということです。競争があれば、成功する人、失敗する人が出て、物質的な格差が生じる。すると、人間には、物質的なものやお金

に対する執着心が生まれる。物質的な豊かさに憧れる。それに伴って、社会全体が拝金主義になり、人々の道徳心が荒廃していきました。

そんな状況に対し、中国政府は経済発展だけでなく、国民の道徳心や心の平穏という精神面も大事だ、と考える。じゃあ、どうすればいいか？そこで、中国共産党が考えたのが、①伝統文化の再評価⁽⁸⁾と、②宗教の復活でした。この宗教の復活という点で、最も基本になるのは、1982年に決定した「19号文件」と呼ばれる宗教政策です。これは、文化革命期の宗教政策を否定して、信仰の自由と宗教活動の再開を認めたものでした。それは、共産党の外にいる宗教の信者を、共産党と共に歩む統一戦線の同志だ、仲間だとした⁽⁹⁾ものです。

それによって、80年代以降、宗教を信仰する人が爆発的に急増する。現在、中国の宗教人口は、約3億人だと言われています。2007年になると、中国政府（胡錦涛政権、共産党第17回大会）は、宗教を積極的に利用する政策に転換します。そして、3億人と言われる宗教の信者と統一戦線を組んで、中国の建設に取り組もうとしてきました。

しかし、中国政府、中国共産党にとって、すべての宗教がいいわけではありません。中国共産党に協力的な宗教に対しては容認しますが、共産党に敵対的な宗教は取り締まりの対象です。その意味で、本当の信教の自由があるわけではありません。では、どういう宗教であればいいか。それは、①宗教指導者に対する個人崇拜をしない、②政治活動に関与しない、③国外の宗教勢力と連携しない、という3つの条件を満たす宗教です。そういう宗教であれば、政府は容認し連携する。要するに、国家を愛し、共産党を支持し、社会の安定に役に立つ⁽¹⁰⁾ということが条件でした。

3 中国のマルクス主義者・馮契の宗教観

次に、マルクス主義哲学史家・馮契の宗教観について見ていきたいと思えます。馮契（1915-1995）は、長年、上海の華東師範大学で教鞭を執られ、唯物弁証法をもって中国哲学史や認識論や価値問題を探求した著名な哲学者です。馮契はマルクス主義哲学者ですから、宗教に対しては基本的に否定的です。馮契の宗教観をまとめると、以下のようになります。

①宗教は人間の依頼心を増幅した。現実社会を軽視し、彼岸世界を説いた。②非科学的な迷信を説いた。それによって、人間の本質的な力の発揮を疎外した。③人々に彼岸世界での幸福を求めさせ、現実逃避をもらし、社会改革を阻害した。④封建制の統治に利用され、権威主義を助長し、独断論になった、という点が挙げられます⁽¹¹⁾。

これらの宗教批判は、基本的に従来のマルクス主義に見られるものと同様です。馮契のこれらの宗教批判は相互に関連していますが、宗教の問題点は、人間の本質的な力の発揮を阻害し、社会改革を阻害する点にあると考えていました。また、非科学的な迷信で、権威主義の独断論であるので、宗教は真理を認識できず、徳性（道徳心）を涵養することもできない。つまり、宗教では、理想人格の養成も、真理の探究もできないと考えていました。

馮契の価値哲学では、人間は真善美と利の価値を実現することによって、人間の本質的な自由を獲得できると説きます。つまり、自由を獲得することが人間の本質であり、人生の目的だと考えました。自由とは、自然の天性の中で養われる道徳性（徳性）であり、その道徳性を獲得するために、人道（人間性）と天道の（宇宙の法則性）を貫く真理を体得する必要があると言います。それを「転識成智」（知識を転換して智恵と成す）と言い、知識から知恵への転換には飛躍が必要であるとしました。

それゆえ、馮契は、自然との合一（中国哲学で言う「天人合一」）を志向

し、具体的な現実社会の中で、有限な人間であっても如何にして無限性を顕現することができるかという、「理想人格」の完成を目指しました。また、こういう知識や智慧は、「天人合一」に到達するための認識論に属するので、「広義の認識論」とも呼びました。⁽¹²⁾

こういった観点から、人間の外に存在する神に依存する宗教ではなく、人格向上を目指す宗教、意識主体の能動性を説く宗教、特に禅宗の「頓悟」については一定の評価をします。ただ、そうは言っても、宗教は科学的検証に堪えない故に、神秘主義や唯心論に陥ったとしています。⁽¹³⁾すると、単純化して言えば、馮契は、①人格の向上を目指し、②社会改革を進め、③科学的に検証できる、三つの条件を備えた宗教は存在しないと考えていたこととなります。逆に言えば、この三つの条件を備えた宗教であれば、承認できるはずで。そうであれば、残る問題は③の科学的検証という点です。

馮契は、科学の理性と宗教の想像性あるいは直観知との関係を指摘し、双方を統一する必要性を説きますが、そもそも科学と宗教の役割は、異なる次元のもので。馮契が言うように、究極の絶対的真理は検証できない故に、宗教の説く本体論を証明することができないのは確かです。しかし、自然科学にしても全てが解明できるわけではない。そうであるならば、自然科学で検証された原理は認める必要はありますが、③の科学的に検証できるという条件は、少なくとも科学と矛盾しない、というレベルまで緩和する必要があるのではないのでしょうか。

馮契は、科学主義と人文主義、あるいは知識と智慧の矛盾を克服しようとして、前述した「広義の認識論」、「転識成智」という理論を提起しました。その意味では、科学と宗教の矛盾を克服しようとしたとも言えるように思います。つまり、これまでの科学は知識論偏重で、人間のあり方に無関心であった。一方、宗教は人間のあり方を説くことに偏重した。しかし、その際、究極の問題には回答できない故に、科学的な実証を無視して、究極的な

存在としての神や天を想定あるいは要請せざるを得なかった。単純化して言えば、馮契は、そういう矛盾を克服しようとしたのではないかと思います。

4 社会主義社会に適合する宗教

3番目に、習近平政権における宗教政策の特色について見ておきたいと思えます。習近平は、2016年に開催された「全国宗教工作会议」において、党はマルクス主義宗教観を堅持しつつも、中国の国情に基づいて党の管理の下で、「宗教・信仰の自由政策」を貫徹すると述べました。その上で、中国における今後の宗教のあり方について、概ね以下のような談話を行いました。⁽¹⁴⁾

- ①マルクス主義宗教観を堅持し、宗教が社会主義社会に適合するよう積極的に導くことが必要である。
- ②宗教信仰の自由政策は、宗教を信仰する人と宗教を信仰しない人々を最大限に団結させることに主眼がある。
- ③宗教を信仰する人々が祖国を愛し、人民を愛し、祖国の統一を擁護し、中華民族の大団結を擁護し、国と中華民族に奉仕するよう導く。
- ④中国共産党の指導を擁護し、社会主義制度を擁護し、中国の特色ある社会主義の道を歩むことを堅持する。
- ⑤社会主義の核心的価値観⁽¹⁵⁾を実践し、中華文化を大いに発揚し、宗教の教義と中華文化との融合に努める。

中国共産党は、宗教信仰の自由とは言うものの、マルクス主義の宗教観を堅持するわけですから、本質的には宗教の世界観とは相違します。宗教は有神論であり、マルクス主義は無神論です。それゆえ、長期的には宗教は消滅すると考えていますが、現状では多くの宗教信仰者がいます。時代は変化し、社会も変転していくものですが、その中であっても、マルクス主義の基本原理は科学的真理として信奉し続ける。しかし、マルクス主義を発展させ

るためには、現代中国の具体的な状況と結びつけて、実践する必要があると
言います。こういった考え方が、習近平政権の宗教政策の特色に繋がってい
きます。

では、習近平政権の宗教政策の特色とは何か？一つが、①社会主義社会に
適合するよう宗教を導くことであり、もう一つが、②宗教の中国化の方向を
堅持することです。この二点については、2017年10月の第19回中国共産党大
会における、習近平の3時間に及ぶ演説や、2018年4月の宗教白書（「中国
の宗教信仰の自由を保障する政策と実践」⁽¹⁶⁾）の中でも強調されています。

では、「社会主義社会に適合する宗教」とは何か。それは、先に挙げた②
～④でも示されているように、中国共産党の指導の下で、社会主義制度を擁
護し、中華民族の大同団結を促進させ、中国の特色ある社会主義の道に貢献
することです。

中国共産党は改革開放以降、経済建設と共に精神文明建設にも注力してき
ました。習近平は、「（経済建設は党の中心課題であるが）同時に物質文明建
設と精神文明建設にも力を入れ、国の物質的な力と精神的な力を共に強化
し、全国各民族人民の物質的生活と精神的生活が共に改善されてこそ、はじ
めて中国の特色ある社会主義事業は順調に前進できる」⁽¹⁷⁾と述べています。つ
まり、精神文明の建設、換言すると、「国の文化的ソフトパワーの向上」⁽¹⁸⁾の
ためにも、宗教を活用して社会主義の精神文明建設に役立てたい、また民族
問題や宗教問題などの矛盾解決のための国内統治に役立てたいということ
です。⁽¹⁹⁾

二番目の「宗教の中国化」というのは、先に挙げた⑤で言うように、「社
会主義の核心的価値観」に基づいて宗教信仰者を指導し、中華民族の優れた
伝統を発揚する。そして、それぞれの宗教教義において、社会の調和や時代
の要請に合致した、現代中国の発展に貢献できる教義解釈を探求し実践す
ることだと言います。⁽²⁰⁾つまり、宗教観の違いによって、宗教を否定するのでは

なく、「社会主義の核心的価値観」の育成・発展に役に立つことが求められているわけです。逆に言えば、「社会主義の核心的価値観の育成・発揚は必ず中華民族の優れた伝統文化に立脚しなければならない⁽²¹⁾」とあるように、中華民族の優れた伝統文化を社会主義の核心的価値の源泉としようとすることを意味しています。

この「社会主義の核心的価値観」という標語、今、中国に行くと、街中の至る所の横断幕や掲示板で見かけます。それは、富強、民主、文明、調和：（国の建設目標）、自由、平等、公正、法治：（社会の構築理念）、愛国、敬業、誠信、友善（国民の道德規範）の24字で表された国と社会と国民が守るべき価値観だと盛んに教育、宣伝しています。

要するに、習近平が掲げる「中華民族の偉大なる復興」という「中国の夢」を実現するための国家目標であり、社会の理念であり、国民の道德規範です。「中国の精神文明を建設するために、宗教は奉仕せよ」。そういった宗教であれば、社会主義中国でも、長期にわたって存続することができるということを強調したわけです。

以上のように、宗教は、社会主義中国の宗教観から言えば、①人格の向上、②社会の改革、③科学的な検証ができない故に、唯心論とみなされてきました。しかし、そうであるがゆえに、具体的な宗教政策の面で、「社会主義の核心的価値観」を探求する宗教を習近平政権は求めている。それを「社会主義社会に適合する宗教」と言ったわけです。

5 創価思想との対話

創価思想を一言で言うと、キーワードは「人間革命」です。前述した内容の関連で言えば、人間自身の変革によって、現実の生活や社会の変革を推進することを強調します。つまり、彼岸世界を説くのではなく、神や仏などの

外在的他者への依頼心を説くでもない。牧口価値論で言えば、利善美の価値を創造することによって、人間は幸福を感じる。人に利する行動をすることによって、自分自身が幸福を感じる。あくまで、人間自身に備わる絶対的価値である仏性を顕現することを目指し、そのために人格完成や社会実践を促すものでした。また、科学的検証という面で言えば、牧口は、①科学・哲学と矛盾せず調和できること、②生活上に現象が現れること、③現象が経文の説く教理と一致する宗教を探求しました。そして、宗教の本質の科学的把握を目指し、信仰の体験とその評価という「価値科学」を提唱しました。

一方、池田は、自然科学から社会科学、人文科学に至るまで、様々な学問との対話を推進してきました。しかも、様々な学問の成果を吸収しながら、池田が信奉する日蓮仏法の現代的な解釈を展開している。そして、その多くが現代科学の成果と一致あるいは近似、さもなくば科学発展の方向性を示唆するものになっています。もちろん、生命のあり方について言えば、自然科学的に検証され、証明されたわけではありません。それゆえ、池田が言う生命の概念は、現段階では科学による直接的な証明にはなりません、少なくとも傍証にはなっています。その意味で、先に挙げた「科学と違背しない」という条件はクリアしています。

宗教は直感智によるところが大きいと言えますが、こういった直観による宗教上の「仮説」は、科学的な理性で全て検証することは不可能です。それは、人間の知的能力に限界があり、その範囲を超えた宇宙の究極にあるものや、人間の生命の本質に関する定義は、すべて「仮説」にならざるを得ないからです。

池田はこの点に関して、「科学上のそれと宗教上のそれとは、区別して考えなければならない」と言います。科学上の「仮説」は理論的・実験的にその真偽が確認されなければならない。しかし、宗教上の「仮説」は人生の納得できない現象をどう説明し、それに基づく判断や行動に有効性を持つかに

よって評価されるべきだ。それゆえ、科学は真偽を問われ、宗教は人間的資質の向上のために役立つか否かの価値が問われなければならないと主張しています。例えば、輪廻しながら生命が永続していくという仏教の「仮説」の場合、確かに自然科学的には証明はできない。しかし、自分以外の超絶者による支配ではなく、現在の境遇は自分自身の責任による主体性の確立を可能にするものだと言います。⁽²²⁾つまり、宗教の存在意義は、一人一人の人間の人格完成にあるということを強調しているわけです。

こうした「価値」という点を馮契と比べてみると、馮契も牧口も池田も、価値は人間の幸福に対する有用性であると考えerる点は共通しています。つまり、対象と主体の関係性の中であって、価値を創造するのは主体の側の努力にかかっています。馮契は真善美の価値の創造を主張し、牧口は利善美の価値創造を提唱しましたが、主体の変革によって価値も変化するわけですから、人間の幸福という価値を実現するためには、主体の変革が重要になってくるわけです。

要するに、馮契も牧口も池田も、人間の内なる価値を如何に高めるのか。主客は相対的であるので、価値は相対的です。それゆえ、人間の精神性を強めることによって、価値創造が可能になり、人間の幸福が実現できると主張します。また、他者との比較による相対的な幸福ではなく、自己の内に築く絶対的な価値を実現することを求めました。馮契はそれを「理想人格」、「天人合一」と表現し、創価思想では「人間革命」と表現しました。

6 おわりに

習近平は、「中華民族の偉大なる復興」という「中国の夢」を実現することが、国家の富強、民族の振興、人民の幸せを実現させるのだと強調します。そのために、経済を中心とする物質文明の建設だけではなく、道徳や文

化を中心とする精神文明の建設にも力を入れてきました。その一環として、本来、社会主義と宗教は相容れない世界観であったものを、社会主義強国の実現に資する宗教として、「宗教の中国化」、「社会主義社会に適合する宗教」という命題を与えて、宗教教義や実践の中から「社会主義の精神文明」に資する要素を汲み取ろうとしています。

確かに、社会主義中国の「宗教・信仰の自由政策」は、中国共産党の管理・指導の下での自由です。その意味では、「宗教・信仰の自由」と言っても、日本でいう信教の自由とは違います。つまり、社会主義の政権維持に抵触しない範囲であれば、個人の信教の自由を認めますが、共産党の政策や社会主義の価値観に反する宗教は取締りの対象になります。また、公共の場での布教や宣伝は認められていない点は、留意する必要があります。

そういった制約があるにしても、宗教の理念、教義、思想の交流という面から考えると、社会主義中国が求めることと創価思想との共通項は多い。なぜ、2001年以降、中国の多くの研究者が池田思想を研究するようになったのか。それは、①改革開放政策の中で、人間の精神性を模索するようになった社会状況、②創価思想、池田思想の人間主義という、人間の変革を促す思想哲学が、中国社会の発展と人間の幸福に有用だと考えたからではないでしょうか。

池田は常々、「人間の幸福に寄与する宗教」を強調し、各宗教のよりよい精神性を発掘するために、宗教間対話を推進してこられました。その中で池田は、宗教間対話の要諦として、次の四点を挙げています。⁽²³⁾①それぞれの宗教が、その創始者の『原点の心』に返る、②対話のための『共通項』を探す、③対話・協力のための『共通の目的』をもつ、④教育による連帯。これらの四点は、社会主義中国と創価思想との対話にあっても、重要な要素であると思います。

また、習近平が言う「社会主義社会に適合する宗教」や「宗教の中国化」

という宗教政策の根底には、宗教の精神性から人間のあり方を学ぶ姿勢が伺えます。その意味で、社会主義中国と創価思想は、両者の宗教観（本体論）に相違はあっても、人間の幸福、社会の繁栄、日中の友好、世界の平和のための対話を展開していく基盤と目的は、互いに通底していると言えるのではないのでしょうか。

池田は日中国交正常化提言から6年後、初めて中国を訪問します。1974年のことでした。訪中の旅を終えた後に、出版社からの依頼で訪中記を執筆し、『中国の人間革命』という書物を刊行しました。当時は、まだ文化大革命の最中でしたが、マルクス主義と宗教に関する見解も述べられています。「宗教のなかには、観念的、迷信的で、現実と遊離したアヘン的なものも少なくありません⁽²⁴⁾」と言い、当時、中国が宗教に対して否定的であることに理解を示しています。

その上で、「もしも、はるかに遠い将来、中国の民衆が宗教を受け入れることがあるとするならば、それは従来の暗いイメージがたゞよう宗教とは全く異なるものであり、“人民に奉仕する”人間を生み出し、民衆文化の創造のエネルギーに満ちあふれたものでありましょう。真の宗教は、どこまでも社会のなかで生き、民衆の幸福に寄与していくものであります⁽²⁵⁾」と、社会主義中国と宗教との将来の関係を予見しています。そして、「(社会主義と宗教の)二つの立場の間には、世界観や物の見方・考え方、価値観などで違いは出てくるでしょう。しかし、この差は、友好の妨げにはならない。結局、人間と人間の生命次元の触発作業こそ、最も大切である⁽²⁶⁾」と主張しています。

これまで見てきましたように、社会主義中国は、池田の50年前のこの予見の方向性に動いてきました。創価との友好交流も発展しました。確かに、この数年の西側の報道では、中国政府による思想・宗教の弾圧など、信教の自由を否定する状況が報じられています。ただ、それは、チベットやウイグル

の独立問題や、イスラム過激派のテロ問題、地下教会の管理問題など、共産党による国内統治の不安定要素を取り除くのが目的です。もし今後、中国政府に、創価思想は「社会主義社会に適合し、中国文化の創造のエネルギー」を引き出す思想、中国社会と民衆の幸福に貢献し、よりよい人格形成に役立つ宗教だと認知されるようになれば、思想・宗教の側面での友好交流もより進展していくのではないのでしょうか。⁽²⁷⁾

注

- (1) 本稿は、2018年9月8日に創価大学で行われた、創始者・池田大作先生の日中国交正常化提言50周年記念「日中新時代フォーラム」（主催：創価大学、後援：中華日本学会）における報告を加筆・訂正した原稿である。
- (2) 銭丹霞「中国の宗教環境と池田思想研究会」（『宗教研究』81巻4号、日本宗教学会、2007年）pp.898-899. では、中国人研究者の間で池田大作に対する関心が集まっているものの、中国に対する宗教的側面での影響についての研究は少なく、今後の課題だと述べている。
- (3) 央忠邦著『池田大作の軌跡1』徳間書店、1980年、p.57
- (4) 高橋強「中国における『池田思想』研究の現状」、『創価教育研究』第3号（創価教育研究所、2004年、2008年『創価教育』に改題）所収。その他、同氏により2017年3月までに「中国における『池田思想』研究の現状（14）」が紹介されている。
- (5) 朱越利主編『今日中国宗教』、今日中国出版社、1994年、pp.20-29.
- (6) 江平「必須堅持馬克思主義関与宗教問題的基本理論観点」（1983年）、江平著『民族宗教問題論文集』（中共党史出版社、1995年所収）pp.343-356.
- (7) 川田進『東チベットの宗教空間 中国共産党の宗教政策と社会変容』第一章「中国共産党の宗教政策——毛沢東から胡錦濤まで」pp.35-82.
- (8) 拙稿「現代新儒学の背景とその視点——中国文化の発展をめぐって」、『創価大学外国語学科紀要』第5号、1995年、pp.19-47. 参照。
- (9) 国家宗教局政策法規司編『中国宗教法規政策読本』、宗教文化出版社、2000年、pp.9-17.
- (10) 江平「認真学習馬克思主義的宗教理論和党的宗教政策」（同上）pp.371-381. 関田泰由「中国共産党政権下における宗教」、『日本大学大学院総合社会情

報研究科紀要』第5号、2004年所収、pp.68-78.

- (11) 馮契著『人的自由和真善美』（『馮契文集』第三卷、華東師範大学出版社、1996年）PP.139-150. 拙稿「科学と宗教——仏教とマルクス主義の対話」（『創大中国論集』第15号、2012年）PP.47-87. 参照。
- (12) 馮契著『認識世界和認識自己』（『馮契文集』第一卷、華東師範大学出版社、1996年）pp.7-50. 拙稿「相対主義と絶対主義の相克」（『創大中国論集』第10号、2007年）pp.43-54. 参照。
- (13) 馮契著『中国古代哲学的邏輯發展』中卷（『馮契文集』第五卷、華東師範大学出版社、1996年）pp.301-310.
- (14) 「党の民族政策と宗教政策を全面的に貫徹しよう」（2016年4月22日、全国宗教工作会議での談話）、『習近平 国政運営を語る』第二巻、外文出版社、2018年所収、pp.335-336.
- (15) 同上の日本語訳では、「中核的価値観」となっているが、原文では「核心価値観」となっているので、本稿では「核心的価値観」に統一する。
- (16) 2018年4月3日付新華網掲載、国務院弁公室が発表。宗教白書は1997年以来はじめてで、中国において宗教信仰は自由であるが、中国は共産党が指導する社会主義国家であるから、宗教は社会主義社会に適合する必要があると強調している。
- (17) 「宣伝思想工作をよりよく行う」（2013年8月19日、全国宣伝思想工作会議での談話）、『習近平 国政運営を語る』、外文出版社、2014年所収、p.169
- (18) 「国の文化的ソフトパワーを向上させる」（2013年12月30日、第18期中央政治局第12回グループ学習会での談話）、同上 p.176
- (19) 江藤名保子「習近平政権が進める『宗教の中国化』とは」（2018年8月11日、笹川平和財団、第8回論考）
- (20) 何虎生、黄菊「開拓馬克思主義宗教観中国化的新境界」（2018年8月6日付、中国民族宗教網）参照。
- (21) 「社会主義の核心的価値観の育成と発揚」（2014年2月24日、第18期中央政治局第13回グループ学習会の談話）同上 p.179
- (22) 池田大作、アーノルド・トインビー著『二十一世紀への対話（上）』（聖教ワイド文庫、聖教新聞社、2002）pp.24-25.
- (23) 池田大作、ハンス・ヘニングセン著『明日をつくる教育の聖業』（潮出版社、2009年）pp.191-196.
- (24) 池田大作著『中国の人間革命』、毎日新聞社、1974年、p.181

- (25) 同上
- (26) 同上 p.182
- (27) 池田は、第44回「SGIの日」記念提言「平和と軍縮の新しい世紀を」(2019年1月26日)の中で、カール・ヤスパースの「限界状況」の「(人生において)客観的な解決などというものは永久にあるわけではなく、あるものは、その都度の解決だけである」という考えを引き、中国と旧ソ連との友好交流について言及した。池田は、冷戦対立が激化した時代に、「宗教者が、何のために宗教否定の国へ行くのか」という批判に対し、平和を強く願う宗教者だからこそ、何としても友好交流の基盤を築きたい、それぞれが「一回限りの状況」だと思って教育交流や文化交流を広げてきた、「万能な解決策」などなかったと述べている。